

## 自著を語る－『溥儀：変転する政治に翻弄された生涯』

塚瀬 進

山川出版社から溥儀の伝記を書きませんか、という電話を受けたのがいつであったのか、もう確かな記憶はない。今度「日本史ブックレット 人」というシリーズで、日本史上の重要人物百名の伝記を出す企画をおこなうので、溥儀について書いて欲しいという依頼であった。その時、溥儀は日本人ではないですが、日本史シリーズで問題はないですか、と聞いたことは覚えている。依頼を承諾したとはいえ、その当時は明清期におけるマンチュリアの社会変容に関する研究に没頭していたので、それが済んでから取り掛かろうと、自分のなかでは勝手に考えていた。

2014年11月に『マンチュリア史研究－「満洲」六〇〇年の社会変容－』を吉川弘文館から上梓し、マンチュリアの社会変容に関する研究は一段落した。山川出版社も心得たもので、『マンチュリア史研究』が出るやいなや電話をしてきて、溥儀の原稿をはやくしてくださいと督促に余念がなかった。

原稿は一字も書いていなかったが、溥儀関係の著作、関係論文の収集はおこなっていた。溥儀について最も詳細に述べている資料は、溥儀が執筆した『わが半生』であることは論を待たない。日本語版にもなっている『わが半生』（愛新覚羅・溥儀『我的前半生』群衆出版社、北京、1964年）は、1964年に中国で刊行されたものである。この刊行から50年近く経ち、現在ではさらに二つの『わが半生』の版本が出版されている。一つは、2007年に旧『わが半生』を補うことを目的に刊行された（愛新覚羅・溥儀『我的前半生：全本』群衆出版社、北京、2007年）。もう一つは、旧『わが半生』の元になったと考えられる、1960年に作成された『わが半生』が2011年に復刻された（愛新覚羅・溥儀『我的前半生：灰皮本』群衆出版社、北京、2011年）。これら三つの『わが半生』を並べて比較検討する作業を進めるとともに、関係論文の読解をすすめ、自分なりの溥儀像を形成していった。

1960年刊行本（灰皮本と呼ばれている）はまだ習作段階ともいえる内容であり、全体に粗削りであり、内容的には階級闘争史観を強く帯びたトーンになっている。撫順戦犯管理所で自己批判の一環として書かれたことが、こうした傾向になってしまった理由だと考える。2007年刊行の『わが半生』は、内容的にはとても無難なものとなっており、溥儀の生涯を知るにはよいが、溥儀自身の心情を理解するにはあまり役に立たない。三つの『わが半生』の版本を比較検討する中で、日本語版にもなっている1964年刊行の『わが半生』をベースにして、溥儀の生涯を復元していくのが良いと判断した。溥儀は『わが半生』の執筆にあたって、それまで門外不出であった故宮所蔵の档案も参照したと述べている。その一部は雑誌『歴史档案』に復刻掲載されたものもあり、溥儀がどのように『わが半生』を書いたのか、検証できる部分も現在では存在する。

日本語、中国語で書かれた溥儀の伝記は多数あるが、溥儀の半生を興味本位に描くものがほとんどであり、歴史学研究の手法を使って書かれたものは少ないと判断した。きちんと書かれたものとしては、溥儀の伝記ではないが、山田勝芳『溥儀の忠臣・工藤忠：忘れられた日本人の満洲国』（朝日新聞社、2010年）が目に止まった。一次資料をもとに溥儀の側近であった山田忠を描いており、その手法には学ぶことが大きかった。

溥儀の生涯を大別すると、①清朝滅亡まで（1906～1912年）、②紫禁城での生活（1912～24年）、③天津租界期（1925～31年）、④満洲国期（1932～45年）、⑤シベリア滞在期（1945～50年）、⑥中華人民共和国期、死去（1950～67年）に分けられる。こうした溥儀の生涯について総合的に研究するには、清朝史、中華民国史、満洲国史、中華人民共和国史、近現代日本史などの多岐に渡る分野の知識が必須である。これまでの溥儀に関する叙述は、日本では日本史をベースにした人が、中国では中国史をベースにした人が叙述しており、やや片手落ちとの印象を受ける内容も散見された。例えば、日本史をベースにした著作は近年に出された中国語資料を十分に活用していない。逆に中国史をベースにした著作は進展した日本近現代史研究の成果を十分に活用していないという問題点がある。そうした欠点を是正すべく、中国近現代史研究、日本近現代史研究のなかで、溥儀に関連した新たな事実や見解をまとめ、叙述に生かす努力をおこなった。簡潔に最新の研究成果をまとめ、ブックレットという短い文章のなかで、わかりやすく溥儀の生涯を述べるというハードルの高い作業に、2014年10月から2015年3月まで取り組んだ。

誕生から清朝滅亡までの期間（1906～1912年）は、溥儀即位の経緯が大きな争点となるが、とくに新たな史料は出されていないので、従来の見解をまとめることで叙述した。この時期の溥儀の周辺の人、とくに父親の載灃に関する研究は進展したので、その成果を使い、溥儀周辺の状況について説明を加えた。

中華民国期の紫禁城での暮らした期間（1912～24年）は、進展した中華民国史研究の成果を吸収して、溥儀の動向を叙述した。これまでの革命派と反革命派の抗争という枠組みに囚われるのではなく、溥儀を利用しようとした政治勢力の動向についても述べてみた。また財政状況について档案を分析して考察した研究を使い、この時の清室の状況についても記述をおこなった。

天津租界で暮らした期間（1925～31年）は、紫禁城を退去させられた経緯については馮玉祥の日記、退去を指揮した鹿鐘麟の回想（鹿鐘麟「驅逐溥儀出宮始末」『天津文史資料選輯』第4輯、天津、1979年）などの中国語史料を使い、退去の目的について述べた。天津租界に行くまでの経緯は、日本外務省の文書、防衛省防衛研究所の文書、当時北京在住陸軍武官であった鈴木貞一の回顧録（山口利昭編『鈴木貞一氏談話速記録』下、日本近代史料研究会、1974年）などを使い、何が問題になっていたのかを明らかにした。

満洲国期（1932～45年）については、近年溥儀が有していた皇帝権力について精力的に研究している樋口秀実氏の成果を参考にして、皇帝即位をめぐる満洲国政府の

状況、帝位継承法の新たな理解などを叙述に盛り込んだ。また、小磯国昭が回想（小磯国昭『葛山鴻爪』小磯国昭自叙伝刊行会、1963年）でなかで述べている溥儀への印象についても書き加えた。

シベリア滞在期（1945～50年）については、瀋陽でソ連軍に拘束されたことについて、陰謀説と偶然説があることを紹介した。陰謀説は溥儀側近の李国雄の回想（李国雄口述、王慶祥撰写『他者眼里的溥儀』团结出版社、北京、2007年）に論拠があり、偶然説はソ連軍将校の日記に論拠があることを述べた。溥儀がソ連当局に出した書簡も近年はロシアの文書館で発見されているので、その内容についても考察を加えた。中華人民共和国期（1950～67年）については、『わが半生』の記述をもとに、死去時の状況について叙述した。

わずか90ページほどの著作であるため、論じることのできなかった問題も多いが、最新の研究成果をもとに、溥儀の生涯を簡明かつ平易にまとめた内容である。関心のある方は一読を願いたい。

塚瀬進『溥儀：変転する政治に翻弄された生涯』山川出版社、2015年7月、87頁。

（つかせ すすむ：長野大学）